

真 生

第七卷 第四號

- ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
- 宗教的偉人の生活には一切が自由である。従て彼等の生活には言ふ所、爲すところ、一として何等の束縛がない。
- 一切は自由であり、体験であつて、そこには何等の模倣もない。全く解脱の世界であり、全く創造の世界である。
- 然に小人の生活は之に反して、一切が不自由の生活であり、いつも教權に左右せられ、信仰に左右せられた生活である。
- 従つて一切が模倣であり、束縛であり、創見がない。又従つて何等の自由も生命もないのである。
- 而も偉人の宗教には永遠の生命が輝き、限り無き望みと力と喜びとの生活が常に開いてゐる。
- 之に反して、小人の宗教には常に闇黒と不安が伴つて、眞實の喜びも望みも力もない。之が恐らくは宗教的偉人と小人の相違であらう。(念)
- ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

如來のもの

目次

如來のもの	尅子
ソクラテスの辯明	土屋觀道
旅中の思出	土屋觀道
言譯	小熊啓太郎
或る僧の話	土屋觀道
吾朋便り	

▽「私は岐阜まで歩いて行く者ですが、空腹で困つて居ります、何か少し恵んで下さい」
○「そうですね、それはお氣毒ですね、いや私も随分経験のあることです、冷飯でもよけりや差上げませう、而し濟みませんが、疲れてはみぬるようだがそれ位は出来るようでせう、そうすれば恵むだ、恵まれるだと厭やなことを云はなくとも掃いて下さつた御禮に温いうどん代を差上げやうちやありませんか、すればあなたも氣持よくお腹もふくれ、まだ先きもある譯だから、腹の空いた場合にはそんな風にせられたらよい経験になりますまいかと思つて、願つてみる次第です」
▽「ハイ……」
○「お厭やですか、それとも疲れてみえるのですか、今迄此處へ来るまでに私の處の外どこでも頼んでみられたことはないのでですか」
▽「二三度頼んでみましたが、何も貰へませんでした」
○「そりやそうでせう、本當に困つてみぬると見ぬ處もありますからなあ、本當に困つてゐる人は訴へることも出来ぬ位の人のことですよ、それまでは私も恵むとか、助けるとか云ふことはせまいと思つてゐます」▽（黙つて出てゆく）

□私は自分の生命の有る無しに拘らず、常にある方に生かされてゐるのだ、そして永久に亦生かされてゆくのだ、といふ氣が沁々いたします。

□このカラダの有ると無いとに拘らず、この生命は無限に活き伸びてゆく私等は平常「私の生命」と云て、私の生命を限つてゐるが、實は「私の生命」など、限つて云はるべきものでなく、生命そのものは無限のものであります「私の生命」でなく、實に「如來さまの生命」でありました。

□「如來さまの生命」を私のものだと思つて、使はしていた、いてゐるのです。いや如來さまは私自身のものとして使はしてゐて下さるところに、如來のみ心があるのです。それを知らずして此れは「俺のもの」だとし、その俺のものを失ふ處に悲しみをも感じて居りました、けれど「俺の物」といふものは一つも無く、其一番尊い生命までが、如來さまのものであつたことを沁々知りました。

□眞に如來さまのものであることを識つて、本當に落附いて來れました。「自分のもの」だと、その「もの」にしがみついてゐる間は、どうかして其の「もの」を失くしたくない、残したいといふ氣でいら／＼してゐます、金を残したい、名聲を残したい、生命を残して行きたいと、金を費ふことにも、壽命を費ふことにも、コレ失くなつて了ひはせぬかといふもおど／＼してゐました、が悉く如來さまのもので、それを自分のものとして使はして戴いてゐるのだといふ感じがハッキリして來て、もう残すだ残さぬだ、減るだ減らぬだといふ問題は消れて了ひました。

□そして唯一つ、使はして戴く以上、最大價値にこれを發揮して戴かなくては勿体ないといふ一念に輝いて來ました。そして一錢の錢、一分の時間、四十年の人生が實に尊くなつて來ました。（尅子）

ソクラテスの辯明

(眞に生るの人)

土 屋 觀 道

二

一、
私たちの毎日の生活に於て、自分に心持のよい時と、又何となくそうでないときとがあります。然に私共の本心は人の知ると知らぬとにかゝはらず、自分の心に満足のできる生活、即ち生き活きとした生活を希むのであります。更に一層之を詳く云ふならば私達の本心は自らに偽りのない生活を欲して止まぬものであります。従つて、凡そ自分の生活に於て、何が苦いと申しましても、自己を偽つた生活ほど苦い生活とてありません。然に世間の多くの人たちは此のことを知らずして、いつしか人を偽り、自らを偽つて、てんとして恥ぢない者が多いのであります。乍然それでは永久に自らを活かすときはありますまい。何となれば凡そ私共の生活の中、自らの生活を自己の本心に反いて生活するほど苦しい生活はないからであります。それでもそれを知らぬのが小人の生活であり、之を斷行するのが眞人の生活であります。

二、

昔ギリシヤにソクラテスと云ふ一哲學者がありました。彼は自分の主張が多くの青年に共鳴せられて反つて當局のきいによれ、それがもとゝなつて、訴へられ、遂に投獄せられた上、死刑に處せられた人

であります。今から貳千四五百年の昔のことではありますが、當時のギリシヤは可なりの發達をしていたもので、やうですが、又それだけ多くの弊害もあつたかのやうであります。

然にソクラテスは此の死刑に對しても、何等恐れるところもなく、又何の不平も起さずして、従容として其の死についたと云ふことです。一人の友人がそれを惜しんで、何とかして之を助け出さうとしたのであります。

「何もギリシヤにのみ居る必要は無いではないか、他の國に行つても生活はできる。逃れる心さへあれば自由である。ソクラテスよ、一刻も早くこゝを逃れたらどうだ。」

「イヤ、自分は國法に背いてまで、此の獄を出やうとは思はぬ。」

「でも、國法なんかどうでもよいではないか、此の獄を逃げて、外國で楽しく暮している人は君も知つている通りでないか。」

「それでは少々君にお尋ねすることがある。そして其の上で、君の云ふのか正しければ君の説に従ふことにしやう。それでは君に尋ねるが、自分達はギリシヤの國民ではないか。」

「それは言ふまでもないことである。」

「然ばギリシヤの國法は其の國民の守る爲めのものであらうか、それとも守らなくてもよい爲めのものであらうか。」

「それはもとより、守るべき爲めのものさ。」

「では僕はもう、此の獄は出ないであらう。僕の死刑は國法の定むるところだ。」

「そんなことがあるものか、たゞい國法だからとて、それを死んでまで守らねばならぬ義務はどこにあるものか、それでは死んでしまふではないか。」

三

「いや、たゞいそれが死ぬことであらうと、國法の命ずることはやつぱりそれを守るのが本當でないか若しそれが本當であるとするならばやつぱり自分は殺されても、喜んで其の死につかうと思ふ。」

「そんな馬鹿なことがあるものか、昔から此の獄を逃れたものは一人二人のことではない。そしてまただれだつてそれを笑ふ人もないではないか、だから早くこの獄を逃げ給へ。」

「いや、自分は國法に背いてまで生たたくない。それにもう年も七十を越えてゐる。たゞい生きても餘命幾何もない体だ。今更ら生たとして何ができるものか。」

「そんなことがあるものか、一度死んだら再び來られない此の娑婆ではないか、一日だつて生きた方が生き得だ。」

「でも、たゞ生きていて何になるものだ、それに僕が此の獄を逃げたら、僕の日頃の主張はどうなるのだ、世間の人は何と云ふだらう。ソクラテスは案外思つたほどの奴でもない、かねて口幅廣く自分の主張をしていたが、命が惜くて逃げたのか、命の爲めには主義も主張もない奴と、多くの人は云ふだらう否、それもまだよいとして、自ら眞理とするこの道を僞つて自分の本心をどうするのだ、自分人から賞められても、又たとい人からそしられても、自ら省みて嫉しくさへないならば何も恐る、ものはない。乍然自分の心をどうするのだ、僕は自分を僞つてまで生きていくことはできない。」

「然し一度死んだらもう何もできないではないか、それに君ばかりではない、已に多くの人が此の獄を逃れて、他の國で楽しく暮して居るではないか。此の國ばかりが世界ではない。」

「いや、そのことならもう言ふことを止してくれ、自分は人がやるとやらぬとに關係はない、たゞい百万の人の反對があらうとも、自分は自分の信ずる神の心に反くことはできぬのだ。」

「では君は殺される事を苦しいと思はぬか。」

「べつに苦しいと思はぬよ。」

「そんなことがあるものか、誰だつて、死を恐れないものはないではないか。」

「でも、僕は死をそれほどこわくはない。寧ろ死は僕にとつて、楽しいものであり、喜ばしいものとさへなつてゐる。」

「どうしてなんだ。世間の誰だつてさうではないか。」

「それはまだ、彼等はほんどうの死と云ふものを知らないからだ。死は必ずしも悲しむべきものではない。それは彼等がまだ眞に生くべき道を知らないからだ。眞に生くべき道に生き行くところ、そこには死からの恐怖はない。死を恐れると云ふことはまだ彼が眞の道を行かないからだ。」

「……………」

「若し、其の人にして、其の道に生るならば寧ろ其の死は恐るべきものではなく、反つて喜ぶべく、楽しいものではないか。」

彼はかう云つて、友の言をしりぢけて、其の死についたと云ふことです。

三、

私は幼少の頃から道を愛した、そして、此のソクラテスの言葉を聞いて少なからず心を動かされたものであります。乍然、死は果して悲しむべきものでなく、反て喜ぶべく楽しむべきものでありませうか否、少くとも私其の心の中に、しかく喜ぶべく楽しむべきものとなつてゐるでありませうか。私は今も尙深く考へさせられて、此のソクラテスの言葉に限りなき興味を覺ゆるものであります。

「死は必ずしも悲しむべきものではない。それは彼等がまだ、眞に生くべき道を知らないからだ」と死を恐れるの所以を明し、更に「眞に生くべきの道に生き行くところ、そこには死からの恐怖はない」と

教へてゐます。而て又、彼は明に其の道に生きて此の死の門を越えたのであります。「眞に生くるの道」此の外に私其の死の恐怖を免るゝ道はない。「生死何者ぞ、我にはたゞ道あるのみ」之がソクラテスの信念であつたのであります。従て、彼はたゞ自らの信する神の道に生きた人であります。そして、神の道とは即ち彼が心の奥底に輝く神の光でありまして、彼の自ら眞理と云ふものが即ちそれであつたのであります。謂換れば、彼は自らの心に之こそ眞理であると信することのできるその「眞理のさ、やき」を神の心、神の示し給ふ道なりと信じたのであります。そして、其の道に従ふことが彼の喜びであり、彼の楽しみでありました。哲學とは眞理を愛するものと云ふ意味だと申しますが此の意味に於て、ソクラテスを古來多くの人には即ち哲學者であると申しますが、彼の哲學は即ち眞理を愛するもの、即ち道を樂しみ、眞理を喜ぶものとして、自らの心に影する神の心に眞に生きやうとした人であつたのであります。

否、彼は確に其の眞理を愛し、其の愛の爲めに自己の一生を献げたのであります。

四、

人誰か自らを愛せないものがありませう。乍然本來自らを愛するとは一体何を愛すことでありませうか。私たちの心は私たちの心に満足するものを好むものである。従つて、眞に心の満足は自己の身命を惜しむものでない、従つて、自ら好み、自ら愛するものならば、私たちはいつしか、身命のせまるのも忘れて、之に没頭するのが常であります。然ば道を愛し眞理を喜ぶソクラテスに自ら道の爲めに眞理の爲めに其の死の自己にせまるのを知らなかつたと云ふことは寧ろ當然のことではなかつたか。否、それどころか、自らの死刑を以つて、之に従ふのが即ち國法に従ふことであり、それがまた、道を愛するもの、當然の道であり、眞理であると自覺した、ソクラテスが自ら此の道に其の身命を屠したと云ふこと

は其の身命を屠と云ふことそのことが即ち自らを愛し、自らを生かすところの大事業ではなかつたか。従つて、彼は自らを愛し、自ら信する自覺のもとに自分をおくべく其の死を見ていたと云ふことが、彼れ自らをして、其の死を喜び其の死を樂しんだ所以であります。

友よ、普通私達の金でさへ、費つてもなくなり、費はなくてもなくなるものならば、費はないのは損ではないか、そしてまた、どうせ費うとしたならば有効に費ふのと無駄に費ふのと何れが本當に自分を満足させることであらうか、それは云ふまでもなく、自己を有効に費ふことではないか。されば道を愛するものは自己を愛するものであり、自己を愛するものは道に生るより他はない。道と愛とは一である身を捨て、道を愛せよ、それは即ち眞に亦自己を愛するもの、態度である。(三、四、二、見附にて)

旅中の思出

土屋觀道

口九日の朝特急で静岡へ立ちました。藤井先生に頼んだ曼茶羅の事で、した。粟生様の御宅で、關様等も集つて下さつた、近々に出版したい爲めであります。先生の御苦心で可なりのものができ

る事かと楽しんで居ります。夜は焼津での集りでした。粟生様も御下下さいました。集る人は三十人ばかり、粟生様へも一席

の御話を願いましたが、キングの中に出ている同行源三を讀んでの御所感でしたが、私始め皆の人々も非常に感ぜられたやうでした。話が終つて、○氏が今度經濟上の難關を切り抜けて、新しき天地に活路を開いて奮闘することに聞かれました。私には喜びました。案ずるよりも産むが安いと古人の言葉もありますが、何事も徒に考へるよりは

先づ思い切つてブツツカル事です。求めよ然らば與えられ、打けよ然らば開かれんとキリストが申しましたが、之は確に一つの活動への眞理であります。

□十日は早朝静岡に歸り、晝過ぎまで關様の別宅に居りました、當家の御隠居が御病氣で床について居られ、念佛の話が聞きたいとの事でした八十歳と云ふのに、御氣分は非常に達者でした、最近までは念佛なんか大の嫌いだつたさうでしたが、近頃病床の人となられてから、とみに念佛のことが口から出るやうになられたと云ふことです別にもう仕事もなく、外に心配のこともないので一家のためにも非常に働かれた人だと云ふので、關様でも出来るだけ看病はしていられるが、そのかはり、本人も一家も全く安態の中に看病をせられてゐる仕末でした。私の高聲念佛を聞かれて心から喜ばれ、はてはスヤ／＼と眠られる模様でしたが、人間もこゝまで来れば先づ占めたものと喜びました。粟生様三四の人も集られましたが、私は晝の特急で名古屋に向つて立ちました。

名古屋に着くや、崇徳寺橋へ行きました。夜は丁度月並別寺で五六の同志が見えました。三河へ行くつもりのが延びましたので、突然當地へ来たやうなわけで、皆の人々と一緒に念佛して楽しみました。其の日は當寺の台所に居た御老人の四十九日の法要日でしたさうで、夕食には其の御供養に任りました、三四の知人の集りでしたが私は法類總の方の代理になつて其の御供養の御馳走にあづかつたやうなわけで、之も亦かねてからの深い御縁であると思ひました。

□十一日と十二日は大垣の集りです。十一日は丁度日曜に當るので朝からの圓通寺での三昧會でした、こゝは永年の桑原様御夫婦の限りない御盡力で、毎月二回の一般公衆への公會佛教講演會が催され、今では少くとも、一二百の聴衆が集まられ、多い時には五六百の大集があるとのことですからして此處の三昧會には其の中からの特種の熱心者が集まられるので、所謂講演だけではあき足ない念佛道友の集りであります。淺野先生や馬淵様一家の御熱心はもとより、佐藤先生や其の他の同

志が熱心な御盡力で、今では桑原様御二人も大安心のていであります。當日の集りは日曜のことでもあり八九十人の集りでした、男女共にそれぞれ非常に熱心さでありました。夜は淺野先生の御宅で集りました。十二日は一般への公開講演でした二百名近くもありましたらうか。私の工業學校時代の先生で最も指導を受けた大橋先生が當地の工業學校長として来てゐられますが、遠路わざわざ来て私の話を聴いて下さつたのは私にとつての最も嬉しい一つの出来ごとでした。先生も自分の生徒からかうした私のやうなもの、でたことをきつと喜んで下さること、喜んで居ります。

□歸京、十二日の夜行で歸京しました。十三、四、五と暇ができたからであります。東京では清水の中村(辨康)上人と九州の立川(圓月)上人が宗會の爲めに見えて居りますので、それらの人々ともゆつくりと久々で語りました。子供のことも三人とも少々風邪引きでしたので心配もありましたが、それは割合に無事でした。道友の語らいほど楽しいものではありません。その代り

□十五日は夜行で大阪へ立たねばなりません。名古屋で夜があけ、龜山で乗換へ奈良下車し、大軌に乗つて貞松院についたのが午後一時でした。晝は女塾の生徒に、夜は豊田様の集りでした。

十六、七日の兩夜は例によつての盛會でした。お互がもうすつかり兄弟氣分で、豊田様が兄さんなら其の他は皆が弟氣分です。上下の區別のあらうはずありませんが、近頃の皆はそれこそ元氣に満されてゐます。

四月は廿一、二日と大阪眞生同盟の家族的大會をやらうと幹部の人たちが工夫をしてゐられました。又五月は十一、二、三日と三日間の宿こみ別時三昧會をしつくりやらうとの催しもあります。

□十八日は尼ヶ崎、之も例月の通りの集りでした。尼ヶ崎は土地柄の爲めか道友の努力の大きなのに比して、集る人は少いやうです。乍然、すべてが少いだけにまた打固つた家族的なしたしみのあることは何よりの嬉しさです。

□十九日の神戸の集りは極樂寺でした。丁度彼

岸會のつとまるるときでしたので、集る人も一層多
いかに見えました。晝は九十名近く、夜は百名も
越えたことせう。乍然、私の喜びは之等の人の
人数の多いのよりも、この道友の人たちが、そ
れこそ兄弟のやうにしたしんでいたゞくことす
世に誠ほど有難いものはありません。男も女も打
とけた、かうした集りは確に當住職の限りなき人
格の力にあることはもとよりでありますが、又道
友のまたなき精進によることも忘れてはなりませ
ん。鶴田氏の會への御盡力はもとより云ふまでも
ないことです。いつも忘れたことのない御影の高
井様に久々で御會いしたことも何よりの喜びでし
た。

又、當夜は福岡工業學校時の同窓が三人も訪ね
てくれたのは近頃のない喜びでした。二十何年ぶ
りの會合でした。歳はとつて若かつた昔の友は又
隔別のもの、やうです。此の朝甲子園に藤村さん
を訪ねましたら、瀧澤愚佛さんも来ていらしまし
た。氏とは昨夜圓平寺でもあつたのでしたが、愈
々健在働いてゐられます。

□二十三日は豫定の通り朝から夕方まで汽車の
中でした。六時何分に柏崎に着きました。出迎の
人々凡そ三十人を越えましたらうか、久々での皆
さんの御顔が喜びで輝いているのを拜しました。
プラットホームへ降りて、原様方へ行きまます途中
私はいつも柏崎の町が俄に光に充つかの感じが
いたしますが、此日のやつぱりさうでした。慈光に
眠る道友の方々が私を迎えてくださるとき、其の
心が如來の慈光に輝くものか、それとも柏崎町全
体に、如來の光が新にさして來るものか、歡天喜
地とはこのことを云ふものでありませう。五日間
の別時は例によつて盛會でした。私こそ夜は全
く本堂の上も下も一ぱいでした。私の喜びを察し
て下さい。最後の日の茶話會には六十何名かの道
友が集りでした。各人の感話は涙ににじんだ感謝
の喜びでした。東京からは神谷善之進様、小美濃
ゆい子様、上諏訪からは藤森さんのお母さまと御
子さんが見えました、之も喜びの一であります。
□二十九日から三日間は同郡の南鑄石でした。
一里ばかり自動車で、あとは歩行とそりでした。

□二十、二十一日の兩日は名古屋でした。二十
日の朝、圓平寺さんと新飼さんに送られて大阪か
ら急行に參つたのでした。岐阜や三河の方からも
見えてゐました。彼岸の中日前後にも當り、一層
楽しい集りでした。

□二十二日は中央線から入つた駄知と云ふ町で
す。黒宮様と服部と云ふ名古屋の婦人の方と三人
連です。晝は白石様で五三の人と語り夜は當地の
禪寺でした。集る人は三十人前後でしたが、當地
は虎溪山の禪寺の影響のある處で佛教に對しては
可なりに熱心の地であります。だから、所謂禪な
自己修養と云ふこと、町村舉つての一致行動に
於ては非常に學ぶことの多い所と思ひます。乍然
悲しい哉未だ少さい自己の修養に捕はれて、圓か
に天地の大道を見る人の少いかに思はれます。從
つて、眞の如來の大悲を感じ、念佛と生活との關
係に生きるには今一層の努力を要すること、存じ
ます。乍然此の地の道友が五三求めてゐられるか
ら、きつと其の中には大きな眞生運動が必ず現は
れて來ること、喜こんでゐます。

八九名が連でした。先方ではまだ三尺以上もの雪
でありました。でも思つたほどの寒さでは決して
ありませんでした。三日とも晴天つゞきで集まる
人も集り易く、岡村様の御宅ではいつも八九十名
ばかりの集りでした。夜晝の集りで晝夜三回の講
演でした。一里も二里もの雪道をその中から見
る人もありました。昨年當地へまいりましたとき
と比べて、全村悉く之に入りさうな勢いでありま
す。

□四月一日、朝早く鑄石を立つて、見附に向い
ました。三日までの集りであります。晝は六七の
方と公園で念佛です。夜は町の寺での講演です。
今井善吉氏のそれこそ全身的活動は可なりに町全
体にひびいてゐます。今や當地眞生の名を知らぬ
人はなくなりました。此の地は非常な有望の地と
して私も屬望してゐます。夜の集りは二日とも可
なりの集りでした。今夜の集りも多いことせう
□明日は三條の集りです。三條は嘗て福田氏並
に堤清六様たちが共鳴以來、一時名をなしたとこ
ろですが、此の五六年全く中絶の姿でありました

編輯余白

常生

然るに今回今井氏の盡力と昔の小池、瀧澤の御二方の發起によつて、再び眞生運動にとりかゝらうと云ふのであります。堤氏の一家も相變らず信仰の人でありますから、私も喜んでゐます。

□五日の朝はもう、東京に在ることせう、永い間の旅のつかれも可なりにあります。子供のことと思ふと其の疲れも忘れるやうです。一家も皆が無事のことです。それに今度は光道さんがゐてくれるので、お父さんとしての私も一層に力つよい喜びであります。僅に在京二三日またしても私は旅の人とならねばなりません、それでもかうして、一家が無事で、妻も子も私如何よりとして待つてゐてくれるかと思へば私の幸福は之で死んでも満足であるさへ感ずるのであります。

□出で、は外に道友の待つあり、入つては一家の喜びを受く、如來を中心とした私の心にはかうして永久に春の日の如くに、のどかなる日を迎へるかと思へば寧ろあまりに勿体ない心もします。(三、四、三、見附今井氏の二階に於て、午後〇時十分擱筆)

□如來様の恩寵だとか御慈悲だとか謂ふ。凡そ宇宙一切の事物皆如來のお慈悲ならざるはない。否お慈悲其ものである。然るに我々は自己に(煩惱我といふ意味の自己に)都合のよい事物だけが慈悲と思ひ。然らざる事物は然く思ひ得ない。躰が健康で物質も豊富といふ時には、これがお慈悲で候と北叟笑むことが出来るが、一朝それが逆轉すれば忽ち、天道様も聞こえぬが飛出そうなる。

□價格百圓の品をこれで賣つて呉れどて壹圓の錢を出して眞面目に言ふ人があるとすれば誰もが馬鹿者と晒ふか、或は氣狂と言ふて取合はぬであらう。然るに一圓程の働よりなさないでそれで百圓以上をセシメ込みたいやうな心持でやつて居る人乃至は働無しの只でセシメ込みたいやうな氣分で居る人を可なり世間でも見受けるやうである。これ等を世間では馬鹿や狂の部へ入れてゐないのは何故であらうか。

言譯

小熊啓太郎

◆誤解され、疑られて、あわてふためき、言譯に汲々たる者は、未だ充分疑られる資格のある者だ。

なせならば、自己自身が、完全に清浄ならば、そんな事位、齒牙にもかけず、馬耳東風だ、屁とも思はぬ俯仰天地に恥ぢず、何をか云はんと、泰然自若でゐられる筈だ。

◆言譯をする、まだ其處に邪心があるから、捉はれてゐるからである。言譯〓邪心の辯護〓自我〓だ。

言譯といふ白粉を塗らなければ、素顔(良心)を人に見られるのが恥かしいといふのと、大同小異だ。公明正大、すべてを脱して裸一貫で、價値ある者でありたい。

「我何をか言はん」と、素顔(良心)で堂々とやりたい。

◆これは、人の事であつて、私の事である。疑はれる程、自分はまだ、不徳のものだと氣付く時、そして亦これを言譯する程、愚かもの、至らぬ者だと氣付く時、

「もつとお念佛することだ。まだ精進が足りない」

と、如來のお仰せらるみ聲が聞ける。(十二、四)

◆吾朋便り

▼美濃西黒野 所 登後子様より
先生には不相變御健かにあらせられ、夜さなく晝さなく西に東に同朋の爲めに、お疲れのおいさひもなく御指導成し下され誠に難有き事に存じ候。妾も先生の御引立によりまして細々ながらも念佛の中に日暮しをさせて頂き居ります、これもみんな先生を通じて如來様よりのお恵みと深く嬉び居ります。

扱、兼てより承りに致し居りましたが三月號眞生を拜見させて頂きまして、御心配遊ばせられし奥様の御産も御無事で、殊に男のお子との御事を知りまして、先生にも嗚々御安心御嬉の御事と遠察申上候。

▼西藤惠様より
春陽ゆたかにてまして道のへの草ももえ出づる頃と相成申候處、御全家御一同様には益々御機嫌うるはしく渡らせられ何より喜上候。拜承致し候へば此度御令息様御出生相成候由誠に目出度く萬々御祝申上候。御母子様共彌が上にも御すこやかにあらせらるる様念じ上候。當宅一同も御蔭を以て極めてなごやかに其日くを一步くすすませ頂き居り

或る僧の話

土屋 観道

之は私が或る人から聞いたことである。
或る日のこと其の住職が非常に急がしいので、「今日は誰が来ても留守だといつてくれ」かう云つて寺の奥で自分の仕事に急がしかつた。

ところが、暫くすると、其の寺の檀徒總代がやつて来て、

「和上はおうちですか？」

住職の妻は住職の云ひつけ通りに、

「今日はおるすです、何か御用でせうか。」

總代は一寸困つた顔して、それには答へず

「どちらへですか、一寸御会いしたいことがあります。」

「昨日××村にと行かれましたが。」

「いつ頃御歸りでせう。」

「明日でないで歸りません。」

「ではまた伺います。實は和上から頼まれた用事だが、和上に一度會つてからでないときめられないことがあるものですから、まゐつたのですが、では御歸りでしたら、さうと傳つて下さい。」

住職の妻、今となつてまさかそれならゐるとも云へぬで、

「まあ、さうでしたか、それはどうもすみませんでした、何れ歸つたら、確どさう申し傳へます。都合では歸り次第御宅へ伺はせませうか。」

「ではすみませんが、さうして下さいませんか、實は可なり急ぐことでもあり、私も一寸氣をもらひますから」

それは住職から頼んだ或る事件であつて、一刻も早く解決をし

て貰はねばならぬものであつた。

然し、住職も今更ら居るとも云へず、それに自分の妻が住職は

居ないと云い切つた矢先き、どうすることもできなかつた。

翌朝急いで、早々から其の總代を訪ねて。

「昨日はわざわざ来て頂いたのに、不在してどうもすみませんでした。」

「ま、よかつた。實は非常に急ぐものだから、私が直接お伺ひしたやうなわけでした。いつお歸りでした。」

「今朝夜行で歸つたものですから、急いで只今伺つたやうなわけです。」

「どうでしたか、それはおつかれでせう。あちらの集りは近頃どうでしたか。」

「さほど大いしたこともありませんでした、それでも、お彼岸でしたので可なりの集りでした。」

候間御放念たまはり度候。

春風の吹きそめてよりこの身にも

そこばかりさなく芽ぐむうれしさ

▼大垣 桑原省三様より

お上人様、先日は難有御座いました、其後御疲れもありませんが、就ては來月二十二日の御來垣を願上ましたが今回大阪より日を特に譲り呉れその切なる御依頼に付、甚だ残念に候へ共大阪も特別の御催に付不得止來月は當地は御中止に相願、五月の日曜(十三日は祭典に付除く)に御都合御繰合せ下され度奉願上候。

▼大阪 岩崎親雄様より

先日は難有う存じました、御上人に御目にかゝる毎に鈍れる心も勇み立ち、更に力強い希望の光に照らされる感じがいたします、本當に私共は眞生の外に何物も無いことを益々痛切に感じさせられます、此上さもどうぞ御指導下さいませ。

來月の御上人御巡錫日割のこと、只今大垣桑原様から御返書に接しました、いろ／＼御都合御差繰下される御模様で、四月二十二日は大阪に御譲り下さる旨御知らせ下さいました、無論四月二十一日も御譲り願つた事として此

の両日を折角の御厚意を無にせぬよう、意氣あらしめ度と祈念して止みませぬ。就ては此兩日實相寺様や中野様の御同行をも熱望いたしますので、此邊お上人より御二方様へ御傳への上是非私共の衷情の満たされませうように御配慮の程御願ひ申上ます。四月二十一日は市民館で大講演會を開き度と思つて居ります

▼東京 谷口年泰様より

來月一日の念佛會にはお上人が御不在でございますから神谷様に柏崎から歸つて代つて頂きますようお願いしてございます。日外お話がくやうにお願ひしてございます。母も來る管でありました東京でのお別時には、母も來る管休ませて頂く考へておますので、若しお別時が四月にございませぬなら學寮の念佛會は第一にさせて頂きたうございませぬ。又お別時が五月なのでしたら、第二日曜に延して頂いても結構でございます。案内状發送の都合もございませぬので御繁忙中恐縮ですが折返し御返事頂きたうございませぬ。神谷様にはお知らせ致しませんからよろしくお傳へ下さい。

▼見附町 今井善吉様より

お上人様には御つかれも御いさひなく御導きの程只管合掌御禮の外ありません、私は商用

其後或る時、其の寺で法事があつた。

××總代「○○さん、あなたの所に、先日はこちの和上が御説教においでたさうですね。」

○○寺院住職「いつですか。」

總代「此の前のお彼岸の時ですよ。和上はお宅へ布教に行つたと云つてゐましたが。」

○○寺院住職は不審さうに、

「さうでしたか、それはどこか間違ひではありませんか、私の寺ではないですが。」

總代「さうでせうか。それでも私は確にあなたのお寺だと聞いたんです。」

隣室で此の話を聞いてゐた私は気が重なかつた。心から其の恥かしさを覺えて全く面目なく、全身全く冷汗をかいてしまつた。そして一度云つた嘘の爲めに私はその嘘をかくすために、重ねて度々の嘘を云はねばならなかつたが、然し私は之位困つたことは無かつた。

私は此の話を聞いて恥しく思つた。私共にはかうした嘘がないだらうか。それに比べて此の和尚はまだ、私共よりも正直でなからうか。

(三、四、二)

で萬止むなくこれより會津、若松、郡山方面に出張致します、歸店は多分二十七、八日頃になります、見附へ御出で願ひますのは四月一日午前十時頃に見附着に御願致したいと存じます、いづれは拜眉の節萬々。

▼東京 土屋美和子より

奈良驛からの御葉書なつかしく拜見いたしました、私の詩心を育て、くれた彼地からしてお父様にもこよなき親しみの古都として頂けるかと思へば一層なつかしい土地となりまして。

十五日夜行はさぞお疲れになりました事とお察し申上ます、其後光道さんも別状なく却てお母さまの心を慰めて下さいます、美智子さんも元氣いよ／＼四月二日愛宕小學校就學指定書が参りました、毎日相變らず讀書三昧です。長子さんも風邪は全快さういふのではありますが、熱は一日だけで済んだようです、元氣はよ／＼御座います、暖も出ません、輕いのでせう、此ま、なら日ならず快くなりませう、ほんまに風邪が流行しますどうぞ御用心あそばして下さい、中野新一郎様は青原醫院に入院してゐられます、名古屋へ御出の時電話でも話たいと申して來ましたから二十日

名古屋の集りの事通知しました、一度尋ねてあげて下さいませ。

▼同上より

お父様！、今日は嬉しい日ですの、何ともいへぬ嬉しい日です思ふたびに涙がにじみまします、光道さんが産れて今日は五十日なお父様！、皆なでお祝ひしませう、今朝お母の顔、皆なで顔ジツト見て「こゝろ二こと何かいふて、ニッコリ笑つたそのお顔、詩といふか書といふか、私には永久に忘れる事の出来ぬ朝でした、お父様にも見せ度う御座いましたよ、原様御一家にくれ／＼もよろしく願上ます。

▼三河田原町 山田マサ子様より

肌寒かりし風も今は心地快く、自由活動し得られる春が参りました。都の春はさぞ楽しくお賑やかな事と存じます、淋しい田舎町に住む私方では家のまわりの植込みの樹木も小さな草花も、暖かな陽に愛でられてツン／＼と目に見えて若芽がのびて居ります、井戸端の桃等はフツクリとして居ります、今にもパツと開きそうな蕾を枝一面に着けてそのうちからチヨイ／＼と若芽を出してゐる美しさ、小路一筋へだてたお寺の藪からはホ

ホケケヨ一と毎朝のように聞えて來ます。

自然の美、如來様のみ手になつた總ては美、ほんまに清浄な美でございます。

▼同上より

世の荒波にさいなまれて淋しく悲しく、思ひに沈んで行く時も、此の自然の美を見つめた時には無限の悦びがわいて参ります、あ、法悦のうちにて育てらるゝ身は幸、感謝で一杯でございます。

「人格の完成」と思ふ度に修養のおつみ遊ばした先生にお會ひ出来な、私には眞生誌がほんまに懐かしく尊く思はれます。

外側から暖かしく尊く思はれます、泉のやうに中からこん／＼と湧き出する信仰を得られよこの先生のお言葉ほんまにござります。心のうちから湧き出る悦びは無限でございます、み佛に抱かれた身は南無阿彌陀佛と合掌せずには居られませぬ。

▼新城町 中島鶴吉様より 編輯部へ

眞生道友の近來の發展振興に目醒しく吾事の様に感じられ嬉しく存候、小生も平常念佛に放れざる様只管慈光中の活躍に努力致し居り候、幸にも願真中二名許り熱心なる求道者あり、其等の人と時に觸れ宇宙の眞理等を語り合ひ、又は眞生雜誌中の或意味等に就き甚だ淺薄なる意見ながらも釋明に勉めなどし折

角修養に勤め居り候証乍他事御放心被下度候今後共宜敷御指導の程願上候。

▼大垣市 満開せい子様より

御上人様、先日は名古屋にて靈導下さいましてありがたう存じます、其後露子日々の仕事行ひ等以前とほつかり變り、朝の掃除に今までは只はい／＼と云ふばかり仕方なくやるのでしたが、此頃ははい／＼と隅々まできれいにしまして、私がお念佛申し居ります中に私の朝やります仕事も致し、髪結びお化粧に至るまで以前より早くでき其上きれいに又弟妹に對して、す直に何事も快よくやつて呉れます、以前は私がごだけ言ひ付けても又頼みてもやれなだ事もさつ／＼とやつて呉れます、實に／＼不思議／＼又面白く又不思議さよりか思われませぬ、あまりの變りに私が却て恥かしく思はれます、露子を見たり思ふに付けてあ、念佛の力の偉大なる事よ念佛なくして何で日暮が出来ましよう、お念佛／＼何んぞ尊いお念佛よ、之れ皆な上人様の御教へかと思ふと誠に／＼ありがたく嬉びに堪へませぬ。以前は口くせに歌を歌ふたのが此頃は念佛の聲となりまして。

觀道旅行日程

四月中

十日朝出發 行基寺へ
 十一、十七日 行基寺
 十八日 四日市眞生製陶所
 十九、二十日 名古屋崇徳寺
 二十一、二日 大 阪
 二十三 名古屋
 二十四 燒 津
 二十五 歸 京

五月中

一日、七日 黒宮平八氏方
 八、九、十日 津島町
 十一、二、三日 大 阪
 十、五、六、七日 三河學母町
 十八、九日 未 定
 廿、廿一日 名古屋
 以下未定

別時三昧會案内

一、五月一日より七日間
 一、黒宮平八氏發起
 一、所 佐屋黒宮氏宅
 參加隨意

眞 生 社

定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓
 振替口座東京四七二八八番 眞生社

行基寺別時三昧會

日時 四月十一日より七日間

所 岐阜縣海津郡城山村 行 基 寺

導師 土屋 觀 道 師 (養老線山崎驛下車十五丁)

前日午后四時頃までに山崎驛迄御出であれば荷物は寺からごりに参ります

行 基 寺

編輯兼 土 屋 觀 道
 發行人 土 屋 觀 道
 名古屋市西區隅田町二一番地
 印刷所 百々 治之助
 名古屋市東區關鍛冶町四ノ八
 印刷所 横 井 印刷所
 東京市芝區芝公園第十四號地九番
 發行所 眞 生 社

(大正十四年八月十三日)

昭和三年四月十日印刷納本

昭和三年四月十二日發行 (毎月一回十二日發行) 第七卷 第四號